

井上淳

きよし

虎鋏

「とらばさみ」

—C・ファイルを追え—



虎
(とらばさみ)
鋏

井上
淳^{Ayushi}

祥伝社

長編推理小説 虎鋏 (とらばさみ)

平成 5 年 2 月 10 日 初版第 1 刷発行

著 者 ^{いの}井 ^{うえ}上 ^{きよし}淳

発 行 者 伊 賀 弘 三 良

発 行 所 ^{しょう}祥 ^{でん}伝 ^{しゃ}社

〒101 東京都千代田区神田神保町3-6-5

九段尚学ビル 〒101

☎ 03 (3265) 2081 (営業)

03 (3265) 2080 (編集)

印 刷 萩 原 印 刷

製 本 ナショナル製本

万一、落丁・乱丁がありました節は、お取りかえします。

Printed in Japan

ISBN4-396-63049-2 C0093

©1993, Kiyoshi Inoue

虎(とらばさみ)鋏

——C・ファイルを追え

目次

いくつかの序曲	5
流浪者たちの伝説	58
ひからびた薔薇 ばら	102
亡霊たちの宴 うたげ	162
それぞれの終章	233
エピローグ―世紀末によつてこそ―	276

表紙デザイン・伊藤憲治

いくつかの序曲

I

どんなかたちであれ、人は誰もいつかは己れの城を築きあげたいと願う。野上宗一はいくつかの職を転々としたあげく、人生の折返し点をとくにすぎたころになつて、はじめてその城を掌にいられた。

横浜港を遙かに見降ろす高台に、ちいさな緑地公園がある。知名度では山下公園に遠く及ばないが、それでもここから眺める港の夜景は、すばらしく美しい。幼いころからこのあたりで育ったこともあって、野上にはきわめて愛着の深い光景だった。かつてこの一帯には鋳物工場が並び、煙突が黒い煙をひっきりなしにたなびかせて

いた。

中学を卒えた野上は、そんな工場のひとつに勤めた。どうしても、この地を離れがたかったのだ。それはたぶん、崖のはずれに腰を降ろして望むその景色のせいだったのだろう。もしいつの日か、自分の城を築くことができたとしたら、それはこの場所をおいてほかにはない。煤と油にまみれて働きながら、野上は胸の隅に、ひっそりとそんな夢を抱いた。そして、四十年の歳月ののち、それを実現させた。

この公園の一角に、スナック菓子やフィルムなどの雑貨を扱う、ちっぽけな店がある。それが、野上の城だった。店とはいっても小屋がけの、吹けばそのままだどこかへ飛んでいってしまいそうな頼りないものだが、しかし野上にとってそれは紛れもない城であり、家族の生活をささえる砦だった。

四年ほど前に交通事故で左脚の自由を失った野上は、その補償金とわずかな蓄えのすべてを、この店に注ぎこんだ。石膏のギプスとプラスチックの管に縛りつけられた病院のベッドのうえで、勤め先からの解雇通知を受けとったとき、野上は市の再開発計画で自宅近くの高台

に緑地公園が新たに設置されることを知った。市街区域総合再開発プランの一環として、長年放置されてきた廃工場跡地を買いあげて整備するという。

野上はやっと、彼の順番が巡ってきたことを感じた。

絶望に彩られた意識のなかに、ほんのひとすじ希望の光が射した。高みに位置するだけあって、そこからは横浜港の全域と市の中央部を眺め降ろすことができる。規模こそちいさいが、山下公園あたりとはまったく違った新鮮な角度からの光景が得られるはずだった。これでペイ・ブリッジが完成すれば、そこからの夜景は、観光客の関心を惹きつける呼び物になるだろう。

野上は、そう確信した。そして、家族の強硬な反対をおしきって、己れの夢に賭けた。障害の身になると同時に職場をも奪われた彼にとって、それは後戻りの許されぬ賭けだった。公共施設への出店はさまざまな権利問題が絡み、容易なことではなかったが、彼は懸命にその難関をひとつずつ乗り越えた。身体障害者としての権利を利用し、議員や圧力団体にすがり、当局との折衝にうんざりするほどの時間をかけて、どうにか昨年の秋、開店に漕ぎつけた。

けれども、当初はおもったように売上がのびてくれなかった。それも、当然だった。

だいいち、ペイ・ブリッジや港内クルーズをめあてに横浜にやってくる人々は、ほとんどがその公園の存在を知らなかった。あるいは、知っていたところで、味気のない住宅街をぬけ急勾配の坂道を登ってまで、わざわざそこを訪れてみるほどの魅力を感じてはいなかった。

要するに、彼らにとっては、山下公園だけで充分だったのだ。公園は付近の子供たちの遊び場になり、夜景を見降ろすためにしつらえられた大口径の望遠鏡も錆び、野上の店も仕入の借金ばかりが嵩む状態がつづいた。野上も帰宅するたびに聴かされる妻の愚痴に、一時はノイローゼ気味になったほどだった。

ところが、そんなある日、唐突におもってもみななかったかたちで、つきがまわってきた。若者たちに人気のカタログ雑誌が、横浜の意外な穴場としてこの公園を紹介してくれたのだ。結局、運なんて、そんなものなのかもしれない。雑誌が発売された当日から、おなじような髪型と服装をした若者の姿が眼につくようになった。その数は、日を追うごとに増加していった。この公園に売店

は、野上のそれ一軒きりしかない——はじめはもう一軒、市の共済会が経営する売店があったが、あまりの不振に三カ月たらずで撤退していた——。

彼らはみな、野上の客になった。あきれたことに彼らの大半は、自分の意志すら満足に伝達できなかったり、芝生のなかに『立入禁止』と大書して掲げられた看板も読めないような者が多かった。だが、そんなことはどうでもよかった。彼らのおかげで、店の売上は瞬く間に数倍に膨れあがっていたのだから。

しかし、その客足が、最近になってふたたび減りはじめてきている。売上の額をみても、はつきりそれとわかるほどに減少しているわけではなかったが、あきらかにその兆候は認められた。客の種類が、すこしずつだが変化してきているのだ。そこに、野上の悩みがあった。あいかわらず客の中心は珍奇なファッションで飾りたてた若者たちだったが、野上の見るところ、その着こなしや態度がどこことなく泥臭い。敏感に流行を創りだしていく都市部の若者のかわりに、ただそれを追いかけるだけの田舎者が増えている証拠だった。若者たちの人気なんて、あてにはならない。簡単に火がつくが、あつという

間に燃え尽きてしまう。この公園も、もはや流行の先端ではなくなくなってしまっているのだ。

そのうえ、近ごろは東洋系の外国人の姿が目立つようになった。言うまでもなく、働き口を探して観光ヴィザや留学ヴィザで入国した不法残留者である。このところの不況で仕事にあふれた彼らは、もてあました時間を潰すためにこの公園に集まってくる。彼らは車座になって芝生に坐り、声高に話しあうだけだった。なにをするわけではないが、そこには一種異様な雰囲気（カウ）が醸（か）だされ、夜景を愉（たの）しみにくる普通の観光客の足を遠のかせる原因になっていた。しかも彼らは、絶対に金を遣（つか）わない。缶（かん）ジュース一本すら買おうとしないのだ。野上にとってみれば大変な迷惑だった。

幾度か警察に訴えてはみたが、いつも複雑な法律解釈を説明されるだけで、つまりは門前払いとおなじだった。このままいけば、いずれ田舎者たちからも飽きられ、かつてのようなただのただのびろい（あ）きき地に逆戻りするだろう。いくら中国人が増えたところで、商売には結びついてくれない。店も、昔みたいに寂（さび）れていく。野上には、それがわかっていた。わかつてはいるが、彼ひ

とりの力でどうなることでもない。胸の底では、漠然とした不安と焦燥感だけがいたずらにつのつていた。

ほんのささやかな風に、ようやく築きあげた野上の城が揺らいでいる。もともとその程度のこしらえにすぎなかったのだが、彼にとつては深刻な問題だった。そこにもつてきて、この雨である。永久に雨が終わらぬのではないか——。そんな想いを抱かせるような、鬱陶しい日々がつづいていた。ほんのかすかな気まぐれにも似た晴れ間を挟んで、これでもう十日近く雨の降らぬ日はない。じつとりと濡れた空気は重く澱み、すべてがうつすらとした穢に覆われ、しだいに腐りはじめているようだった。

もちろん、人の心も例外ではなかった。饞えた臭いが街を包み、そこを俯いて早足で歩く人々は、誰もがいらいらと神経をささくれたせ、誰もが世界中の不幸を背負い込んだように、ときおり立ち止まって短く溜息をつく。天候はてきめんに客足に影響し、この一週間の店の売上総計は、晴れた日一日分のそれにも満たない。店の軒先に佇み、野上は噂い空を見上げて、眉間に深い皺を刻んだ。

多少小降りになってきたようだが、まだしばらくはとも熄んでくれそうになかった。野上はひとつ舌うちをくれると、いらだたしげな面もちを隠そうともせず、店内をふりかえった。狭い店のなかには、合成樹脂を貼ったちいさなテーブルと、そのまわりに三脚の椅子が置かれている。いちばん隅の椅子に、男がひとりこちらに背中をむけて腰掛けていた。憎悪をこめた眼で、野上はその幅広い背中を睨みつけた。ガラスを爪でこするように野上の神経を刺戟するものが、もうひとつそこにあった。野上にとつてその男は、とほうもない災難を担ぎこんできた疫病神だった。そう、はじめて彼に逢った翌日から、このいまましい雨が降りはじめたのだ。

もう、二十日ほど前のことになる。この公園で、深夜、中国人の青年が撲殺されるという事件があった。数人に鉄パイプ様の鈍器で乱打され、頭蓋骨折が致命傷になった。ほかに、全身に十カ所近い骨折があった。よってたかつてなぶり殺しにされたのだ。死体を発見した野上が嘔吐し、その後何日も寝つかれなかったほどの惨いありさまだった。

野上の不運は、彼がその事件の唯一の目撃者になって

しまったことにはじまる。その夜、忘れ物を取りに店に戻った彼は、公園に通じる坂道の途中で、三人の若者とすれちがった。みんな昂奮したふうに甲高い笑い声をあげ、はつむように坂道を駆けおりていった。誘蛾灯のぼんやりしたあかりの下で、三人の顔までははっきりと見てはいない。

しかし、ふたりの仲間をせかせるように最後に坂道をおりていった若者——彼は三人のなかでもっとも体格がよく、逆立たせた髪を金色に染めていた——が、長い棒杭らしきものを掲げていたことは憶えていた。そして野上は、それから数分後に公園の芝生で、無雑作に投げだされた死骸をみつけた。

犯人は、野上がすれちがった三人組の若者たちにまちがいなかった。

昨年の暮れあたりから、山下公園で浮浪者や酔っ払いが突然若者のグループに襲われ、殴る蹴るの暴行をうける事件があいついでいた。いきなり数人でまわりをとりかこみ、ひたすらに殴りつけるというむちゃくちゃなやりかたで、被害者とのあいだに怨恨や利害の関係があるわけではない。ただ暴力衝動を剝きだしに発散させる、

狂犬じみた犯行だった。

野上にはとても信じられなかったが、警察の調べによるとそうしたグループがいくつも存在するらしい。まったく手加減を知らぬ暴力だけに、被害者のなかには死亡したり、植物化したりする例もあるという。今年の春先には、浮浪者がガソリンを浴びせられて焼死する事件があり、さすがにそれを契機に警察も徹底した取締まりを断行し、山下公園を舞台に残虐行為をつづけていた若者グループがいくつか検挙された。

「浮浪者を焼き殺したのは、予備校で知り合った五人の浪人生でしたよ。あきれたことに、なかにひとり女の子もいました。受験勉強のストレスを解消するためにやったというのですから……」と、野上から事情聴取にあたった初老の刑事は、憂鬱な声で吐きだすように言った。「まったく、どうなっているのだから」

中国人労働者を襲って殺害した三人組も、警備の強化によって山下公園から締めだされたそうしたグループのひとつにちがいない、と刑事は断定的に言った。刑事は自信たっぷり、すぐにも犯人が逮捕されそうな口ぶりだったが、実際のところ野上の眼からは、事件に取り組

む警察官たちの姿勢に、どこかしら熱意の乏しさが窺えた。それはあるいは、被害者が一年も前に滞在期間の切れた旅券を持つ不法滞留者だったせいなのかもしれない。

ともかく野上は、警察やジャーナリストへの対応で、二日のあいだ店を閉めなければならなかったが、事件は新聞やTVのニュースで数回報道されたきりで、たちまちのうちに忘れられた。刑事たちの言葉とはうらはらに、一週間経っても犯人は逮捕されなかった。公園に集まる中国人の数もすぐにもとどおりになり、一般の観光客がまだなまなましきの残る殺人現場を敬遠したおかげで、店の売上は激減した。

野上は気が気ではなかった。商売の不振もさることながら、なにより彼は殺人犯人を目撃したただひとりの証人なのだ。あの間隔ですれちがっていれば、当然むこうも野上の顔を見ている。彼らが唯一の目撃者をあつさり無視するという保証は、どこにもない。むしろ、警備のためにときおり刑事たちが店に顔をのぞかせるが、それも二十四時間べったりで保護してくれているわけではなく、いつまでつづくのかもわかったものではなかった。

あのときとおなじような髪を毒々しい色に染めた若者が店に近づいてくるたびに、野上は心臓がきゅんと音をたてて縮みあがるような思いを味わった。野上は、己れがとんでもない不幸に見舞われたことを嘆き、天を怨んだ。

しかし、彼の不幸はその程度のことでは終わらなかった。左足をひきずってびよびよこと滑稽な格好で歩く禿頭の小男をいじめぬくことに決めた神様が用意したきわめつけの災厄は、そんなとき野上の店をひっそりと訪れたのだ。

それが、この男だった。そろそろ店を閉めようとした時刻だった。店にはいつてくるなり、男はいきなり野上の鼻先に黒革の手帳をつきつけ、「警視庁特殊外事課の仁科剛介」とだけ、ひどくぶっきらぼうな口調で名乗った。野上はすっかり思考力をなくしてしまったように、そこにつたつたまま啞然として男の顔を見返した。

警察手帳の身分証をみせられても、彼が刑事だなんてすんなり信用することができなかった。だいいち、そんな部署がほんとうに警視庁に存在するのかどうか知らなかった。そのままでの姿勢でずっと待っていたが、仁科と

名乗った男は、それ以上なんの説明もしてくれなかった。背の高い、がっしりしたからだつきの男だった。野上の頭が、胸元あたりまでしか届かない。

岩肌を鑿^{のみ}で削^けつたような無表情で瘦せた顔には、うっすらと不精^{ふせい}髭^{ひげ}の鬚^{かげ}が滲^{にじ}んでいる。眼は濃灰色にどんよりと濁^{にご}って眠たそうで、なにも見てはいないようだ。いかにも冷酷そうな薄い唇の端に、短くなったピースをくわえていた。その紫色の煙^{けむり}だけではなく、からだ全体に痺^{しび}れじみたなにかをまとわりつかせているようで、なぜだか野上は背筋にひややかなものを感じた。

要するに、刑事というより、むしろそれに追われる役柄のほうかふさわしく思われるような男だった。しごく簡単な挨拶を済ませると、仁科は壁際に据えられた大型の冷蔵庫からロング・サイズの缶ビールを勝手に取りだし、椅子に腰を降ろした。野上は二、三度眼を瞬かせ、左右に忙しく頭を振ると、「いったい、どういうことなのでしょううか」と、なんとも間の抜けた調子で、やつとそう訊いた。

仁科はビールを呑み終えるまで、なにもこたえなかった。野上は彼を警護するために派遣された刑事なのだから

うかと思つた。だが、すぐにその考えをうち消した。管轄^{かんかつか}の神奈川県警ではなく、警視庁のそれも、しかも特殊外事課などという部署の刑事が、ぜんたいどんな用事があつてやつてきたのか、さっぱり掴^{つか}めなかった。

仁科は空になったビールの缶を掌^{てのひら}のなかで握り潰^{つぶ}してゴミ箱へ投げ捨てるのと、ゆっくり野上にむきなおり、

「あなたが目撃したという中国人労働者殺害犯ですが——」面倒くさそうな口調で言つた。「じつは、二月ばかり前、都内世田谷区^{せたがや}の児童公園で、やはり不法滞留者のパキスタン人が若者に襲われ、半身不随の重傷を負っています。依然として被害者が意識不明なので断言はできませんが、傷の角度や遺留物の状況から、犯人は三人程度のグループだったと推定されています。あなたが見た若者たちも三人組だったそうですが、われわれはこのふたつの事件が同一犯人によるものではないかと考えています。神奈川県警の見解とはいささか異なりますが」「は……」脳髓^{のうずい}の芯^{しん}にまだ痺^{しび}れが残っているのか、仁科の言葉をうまく理解しかねて、野上はほんやりした声を返した。「それで——。目撃といつても、わたしは犯人の顔をはっきり見たわけではありませんし……」

しかし、仁科は野上の反応などまるで意にも介さず、解けな表情でつづけた。

「犠牲者がふたりとも外国人労働者ということで、われわれが神奈川県警に捜査協力することになったのです。

といって、あくまでも主体は神奈川県警の捜査本部にあり、こちらは遊撃隊程度のものにすぎせんがね」

言葉つきこそ穏やかだったが、はつきりと不機嫌さがつたわって来るような言い方だった。深夜にTVで放映されるアメリカ映画でよく観たことがあるが、むこうの刑事は犯人を逮捕すると、その場で諸権利条項を教えこむ。犯人にそれを理解する知能があるうとなかろうと、そうすることを義務づけられているのだらう。だから警察官は、紙に書かれたものを棒読みするようなまるで感情の窺えぬ調子で、それを言う。

仁科の口調は、それにそっくりだった。野上は得体の知れぬ不安を覚えた。この男がほんものの刑事なのかどうか、まだ半信半疑だった。いきなりあらわれて、売り物のビールを勝手に呑み干し平然としている刑事なんて、現実にいるものだろうか。

「犯人の顔は見ていませんよ、わたしは……」そうくり

かえして、野上はおびえたように口ごもった。「知っていることはなにもかも、県警の刑事さんに話してありますし」

「ええ」仁科はうなずいた。「証言の内容は、こちらでも聴いています。率直なところ、たいして役に立つものではないかもしれません。しかし、情報はともあれ、あなた自身の存在はきわめて興味深い」

野上は戸惑った表情で、「どういう意味です、それは……」と、つぶやくように言った。

胸のあたりにむず痒いような、厭な感覚があった。不吉の予兆かもしれないかった。

仁科は腕をのばして、冷蔵庫から二本目の缶ビールを取りだすと、

「パキスタン人襲撃から二カ月、われわれものんびりと昼寝をつづけてきたわけではありません。正直に言う」と、犯人の輪郭は、すでにほぼ正確に把握されています。名前も居所もわかっていのです」

「だったら、なぜ逮捕しないのですか」野上は不服そうに唇を尖らせた。「いますぐにでも——」

「できれば、そうしたいのですが、残念ながら、逮捕に

踏み切るだけの確証がこちらにはないのです」

仁科はそつげなく言つて天井を仰ぎ、冷えたビールを喉に流しこんだ。

「だが、だからといって、彼らをいつまでも野放しに泳がせておくわけにもいきません。遊びにせよ気晴らしにせよ、彼らはまたかならずおなじような犯行をくりかえします。居場所はわかつているのですから、早急にそこへ糸を投げいれ、彼らを釣りあげてしまわなければなりません。ただ、それには餌が必要ですよ」

「どうも……、おっしゃっていることが、わたしには——」野上は禿けた頭を撫でまわした。

しかし、そこまで言つたとき、臆気ではあつたが仁科の狙いが見えてきた。仁科はその釣り針の先に、野上をくくりつけるつもりなのだ。「冗談じゃない。あんた、まさかおれを」おもわず声を荒らげていた。

「そのとおりです」仁科は笑つた。いや、笑つたのだらう。頬をかすかに痙攣させた。「彼らは自分たちが今や、殺人犯として追われていることを知っています。おそらく彼らの胸は、恐怖と後悔ではちきれんばかりになっているでしょう。けれども、自首するだけの勇氣は、

もちあわせていない。なんとかして逃げきろうと考えているにちがひありません。そんな彼らが、唯一の目撃証人であるあなたをそのままにしておくでしょうか」

たしかに、野上にもその危惧はあつた。「でも、県警のほうじゃ……」

「捜査本部とわれわれの考えかたには、その点についても若干の相違があります。脅かすわけではありませんが、あなたに危険が及ぶ可能性はかなり高い。すくなくとも、そうわれわれは判断しています」

「馬鹿なことを言うなよ」野上はほとんど叫んでいた。「だったら、保護してくれるのが当然だろう。それなのに、警官ひとりつけてくれるわけじゃない。そのうえ、おれを囮にしようなんて」

「だからわたしが、こうしてやつてきている」仁科はうんざりしたように、野上を睨み据えた。「機動隊でも用意してこの店を包囲させれば、あなたは満足かもしれないが、それでは彼らが網にかかつてくれない。あなたの安全は、わたしが責任を持つ。いずれにせよ、長いことではない。協力してもらえないか」

仁科の眼に射抜かれて、野上は我知らず後じさってい

た。だが、必死で声を励ました。

「あんたたったひとりで、なにができるというのだ。四六時中、おれといっしょにいてくれるのか。寝るときも、飯を喰うときも……。それに、糞を垂れるときも便所のなかまでつきあつてくれるのか」

語尾がだらしなく震えた。野上は肩を波うたせ、額に脂汗を滲ませている。

「そんな必要はない」仁科は、ひややかに言った。「彼らだって、底無しの阿呆ではない。襲うとすれば、あなたがひとりだけで、周囲に他人がいけないときだ。つまり、ちょうどいまの時間帯ということになる」

野上はぎくりと頸を竦め、あたりをみまわした。金髪の男が、そこにいるような気がした。

「安心しろ。われわれのほかには、誰もいない」仁科は退屈そうに言った。「集まっていた中国人たちが帰り、あなたが店を閉めるまでの一時間たらず。彼らにとって、これがもっとも都合のいい時間になる。つまり、あなたを警護するのは、このあいだだけで充分だ。それ以上つきあう気は、わたしにもない」

「そんな、無茶な」野上は蒼白い顔で、「いくらなんだ

って、あんたひとりで……」と、そう言ってから、ぐくりとおおきな音とともに喉を鳴らし、からからに乾いた口を、唾で湿らせた。

仁科は静かに立ちあがると、「信用しろ」と、野上の背中を片掌でかるく叩いた。

「約束する。あなたには擦過傷ひとつ負わせはしない。さあ、家まで送ろう」

そして仁科は、翌日もまた、おなじ時刻に店を訪れた。粘りつくような雨をともなつて――。

それから、十日がすぎた。あれ以来、なにも起こってはいない。野上の不安も、すこしずつ薄らいできていく。最初の数日は、いてもたってもいられないほど心配だった。夜が更け、公園の人影が減ってから、仁科がやってきてくれるまでの時間。それが、永遠にもおもわれた。

しかし、近ごろではちがう。神奈川県警の刑事たちが言うとおりの、犯人たちはやはり、野上のことなど忘れてしまっているのかもしれない。そう考えてみることもある。しよせんは、頭のネジがすこし緩んでしまった子供たちなのだ。そんな子供たちのことで、あれこれ思い悩